

栄光園だより
第128号
2022年7月29日発行
発行 栄光園
社会福祉法人
別府市南荘園町3組
〒874-0904 電話 (23) 2827
http://www.eikoen.jp/
編集 広報誌編集委員会
印刷 大野印刷株式会社
別府市青山1-7 電話 (21) 0505

「自分の思いを言葉で伝える」ということ



西南女学院大学
保健福祉学部福祉学科

講師 **文屋 典子**

栄光園評議員

幼児期の子どもが、自分なりの言葉を使って、思いを精一杯伝えようとする姿はとても微笑ましいものです。子どもが急速な勢いでことばを獲得する時期、保育所の生活の中で出会う驚きや発見、心を動かされる体験は「伝えたい」「気持ちの原動力になります。そして、一生懸命に言葉を選びながら伝えようとする子どもを、身を乗り出すように心と体を傾け、真剣に聴く友だちや保育者の姿は、伝えようとする頑張りの後押しします。多くの場合、保育者の「聴く」姿は子どもたちの「聴く」姿のモデルになっっています。このような相互作用を通して、子どもたちは言葉で伝えることを楽しいと感じ、

自分の思いを安心して伝えることができるようになり、言葉はさらに豊かになり、表現する力が養われていきます。ところが、こうして幼児期に表現することの喜びに出会った子どもたちがある時期になると、自分の思いを言葉で伝えることに困難を感じる経験をすることがあります。

ある20代の女性は、中学生の時、学校に行けない日々が続きました。「なぜ学校に来られないのか、その理由をはっきり言いなさい」と自宅に押しつけてくる担任に、毎晩のように詰め寄せられたといいます。

理由がないわけではない。様々な出来事や思いがありすぎて、何をどう伝えたらいいのかわからない。先生に反抗する気持ちなど抱いていないけれど、先生の前に立つと言葉を失ってしま

う。そんな自分を、先生はきつと反抗的な生徒だと思っているのではないだろうか、そう思うとまた言葉がみつからない。すでに私は「学校に行けないダメな生徒」なのだから、何を言っても、先生には否定されるかもしれない。だとしたら苦労して見つけた言葉も無駄になる。様々な思いを巡らせる中、彼女は「思いを言葉にすることができなくなってしまう。そしてある日、担任に言われた言葉が今でも忘れられないと言います。「あなたよりずっとしんどい思いをしているのに、頑張っている人はたくさんいるんだよ！」

思いは言葉にしなければ伝わらない。言葉で表現できないのは思いや考えがないのと同じ。このような評価・判断の前に、彼女の「しんどい思い」も「今、直面している状況や思いを言葉にできないつらさ」も、誰からも理解してもらえないこと、気づいてさえもらえないことへと固定化されてしまいました。

思春期臨床に長年携わっている精神科医の青木省三は、思春期のもやもやとした気持ちや感情を言葉にする「言語化」について、「もし言語化がなされるとしたら、それは強制のもとに行われる、話させられるというようない受動的なものではなく、時期が熟し、自ずと言葉になるような、あくまでも青年の側からの主体的なものを大切にしたい」と言います。また、話を聞いている中で思い浮かんでくる「ぼんやりとしたストーリーのようなものは、



思春期のことば

面接の中で改めて尋ねて細部を埋め合わせるなどして「くつきりとしたストーリーにしよう」としないうことが大切なように思う」と指摘します。

「伝えたいこと」を「適切な、正しいことばで」伝えることが重視される幼児期とは異なり、思春期・青年期の「自分の思いを言葉で伝える」作業は、時として先の見えない長く苦しい作業となります。幼児期に比べるとたくさんさんの言葉や表現を獲得しているのに、「自分の思いを伝えること」がとても難しいことになってしまふのです。彼らが自分の思いと向き合い「言語化」しようとする姿に寄り添うとき、保育所で「思いを懸命に言葉で伝えようとする」子どもを励まし応援する保育者の姿を思い浮かべます。

保育所の子どもたちが、友だちや保育者に励まされて「自分の思いを言葉で伝える」ことを成し遂げていくように、思春期・青年期の子どもたちにも、安心して自分の思いを自分らしく語ることのできる環境が、そしてそのときが来るまでたわいのない言葉を交わしながら関係性を温めるような関わりが求められると考えます。彼らが少しずつ紡ぎ出す言葉を受けとめ、支えつつ、「思いを言葉にする」時間にゆっくりと寄り添っていききたいものです。

【引用】青木省三著『思春期の心の臨床 第三版』金剛出版 2020

